別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　第　号

氏　　名　Viengsakhone LOUANGPRADITH

論　文　題　目

Trends and risk factors for infant mortality in the Lao People's Democratic Republic

（ラオスにおける乳児死亡の動向とリスク因子）

論文審査担当者

主　査　委員　名古屋大学教授　岩井　建志

委員　名古屋大学教授　八谷　寛

委員　名古屋大学教授　高橋　義行

指導教員　名古屋大学准教授　山本　英子

別紙１－２

論文審査の結果の要旨

今回、ラオスの社会指標調査データの二次解析により、乳児死亡率（出生 1,000 対比）が 1978 年～2017 年に 191 から 39 まで改善したことが明らかになった。乳児死亡率と新生児死亡率との差は徐々に縮小していたが、2009 年以降は縮小が認められなかった。過去 2 年以内に生児を分娩した 2,189 名の女性の子供の乳児死亡と相関する因子は、補助看護師による分娩介助、男児、出生時に平均より小さいことであった。子供が出生時に平均または大きかった 1,950 名の女性では、妊婦健診が 1－3 回、補助看護師が分娩介助、男児、児の出生後健診あり、調査時に妊娠していることであった。補助看護師の中級看護師へのレベルアップや妊婦健診の質的改善を含めた母子健康管理および家族計画を強化する必要があることが示唆された。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 重度のサイアミン欠乏症は心不全や神経障害を引き起こし死に至る。ラオスは白米中心の食生活に加え、産後の食事制限の文化もあり、妊婦や授乳婦にサイアミン欠乏症を多く認める。サイアミン欠乏症による乳児死亡は生後 1-3 か月がピークである。以上より、ラオスの乳児死亡率と新生児死亡率の差が縮まらない原因の一つは、サイアミン欠乏症であると考えられる。
2. 社会指標調査に参加した 15-49 歳の女性のうち、過去 2 年間に単胎の生児を分娩し、その子供が調査時に生存し 1 歳以上、または既に死亡した女性 2,189 名を対象とした。子供の 1 歳未満の死亡を従属変数、社会人口統計学的因子、産科的因子、子供の因子、夫による暴力への考え方を独立変数として多変量ロジスティック回帰分析を強制投入法およびステップワイズ法（増減法および減増法）を用いて行い、結果を比較した。乳児死亡に関する過去の研究で用いられた因子を参考にして、本研究における独立変数を選択した。
3. 3 つの因子について、2,189 名の女性の分布（乳児死亡率）は以下の通りであった（サンプルウエイト使用）。分娩介助者は医師が 1,113 名（4.3%）、看護師・助産師が 196 名（8.2%）、補助看護師が 17 名（23.5%）、なし・その他が 761 名（9.6%）であった。子供は男児が 1,114 名（7.9%）、女児が 974 名（5.4%）、分娩時の大きさは平均が 1,579 名（5.5%）、小さいが 185 名（17.8%）、大きいが 287 名（5.2%）であった。

本研究は、ラオスにおける乳児死亡率改善のために、重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

別紙2

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第　　号	氏　名	Viengsakhone LOUANGPRADITH
試験担当者	主査　岩井 建志 副査2　高橋 毅行	副査1　八谷 寛 指導教員　山本 英子	

（試験の結果の要旨）

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1．サイアミン欠乏症と乳児死亡の関係について

2．乳児死亡に相関する因子の解析方法について

3．乳児死亡との相関因子（分娩介助者の職種、児の性別および出生時の大きさ）における対象者の分布について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、医療行政学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。